

「令嬢ジュリー」(ストリンドベリ)

十九世紀末のスウェーデン、夏至祭の日、伯爵家では召使達が夜通し浮かれて踊つてゐた。臺所では下男のジャンと料理女のクリスティンが伯爵令嬢ジュリーの氣違染みた振舞について語り合つてゐる。令嬢が森番や下男の自分と踊るなんて尋常ぢやない、「お嬢様はいやにお高くとまつてるかと思ふと、また妙に下司なところがあるな、亡くなるまへの奥様そつくりだ」とジャンが云ふ。令嬢の亡母は男女同權思想にかぶれた平民出身の女であつた。クリスティンが、お嬢様は婚約が破談になつてお辛いのだと云ふと、お嬢様が許嫁の男を犬みたいに扱つて憤慨される場面を自分は見たとジャンが云ふ。そこへジュリーが入つて來て一緒に踊れとジャンに命じる。ジャンは躊躇ふが、ジュリーは承知せず、ジャンを連れ出して踊り狂ふ。

やがてジュリーは臺所に戻り、ジャンと二人でビールを飲みながら會話を交す。ジュリーは夢の話をして、自分が高い柱の上に座つてゐて、勇氣が無くてどうしても下に降りられず、苛

立つ夢を良く見るけれど、地面に着いたら、もつと下の、地の底へも潜り込みたくなるかも知れないと云ふと、ジャンが、自分が見るのは大きな木の上へ昇つて、鳥の巢を探して黄金の卵を手に入れる夢だと云ふ。様子が良くフランス語も喋れるジャンに惹かれて、ジュリーが際どい戯れ方をする。ジャンは、少年の頃、庭で見たジュリーの姿に戀ひ焦れ、もう一度會へたら死んでもいいと迄思ひ詰めたといふ話をする。すると、外で召使達が二人の陰口を云ひながら歌ふ聲が聞えて来る。二人はジャンの部屋に隠れる。

ややあつて二人が臺所に戻つて来る。情を交した二人の間で口論が始る。この儘ではゐられない、外國に逃げホテルを經營して暮しを立てよう、とジャンが云ふと、資金が無いとジュリーが云ふ。でも、貴方の情婦になつて、召使には後指を差され、お父様の顔もまともに見られないなんて、「ああ、なんてことをしてしまつたのだらう」とジュリーが嘆くと、泣言は止める、「女をものにする美辭麗句」を信じた淺はかな「賣女」めとジャンが罵る。その通りだわ、どうか「このさげすみとけがれ」の中から救出してとジュリーが泣く。「どうせ同じ穴の貉ぢやないか、上品ぶるのはいい加減にし」ろとジャンが叫ぶ。

結局、ジュリーは進退谷まつて自殺に迫込まれる事になるのだが、G・スタイナーは作者ス

トリンドベリについて、彼は自らの「個人の魂に鏡を掲げ」た劇作家に他ならず、「戯曲といふ極めて公的な形式を用ゐてかくも私的な表現を行つた劇作家は他に無い」と書いてゐる。「下司」な欲求に押流されて、「さげすみとけがれ」に苦悶するジュリーも、上昇の欲望に驅られて令嬢も下男も「同じ穴の貉」だと嘯くジャンも、作者の紛れも無い分身だが、もう一人重要な分身がある。信仰心篤いクリスティンは二人の關係を察知して、「ふしだら」に染りたくないとして伯爵家を去らうとすると、偉い奴らも「同じ穴の貉」と知れば氣樂ぢやないかとジャンに云はれ、違ふ、あの人達が自分より「偉くない」と分れば「偉くならうと努める甲斐」が無くなつて了ふと答へる。メイヤーの英譯では「偉くならうと努める」は *improve ourselves*（「己れ自身を善くする」となつてゐるが、ストリンドベリが描いたのは、畢竟、眞摯な信仰に縋つて「己れ自身を善く」しようとする努力の限り、終に救ひ無き人間の現實である。「自らを善くする事、世界を善くする爲に我々に爲し得るのはそれしかない」とヴィトゲンシュタインは云つたが、それは本當の事である。（千田是也譯、「ストリンドベリ名作集」、白水社）